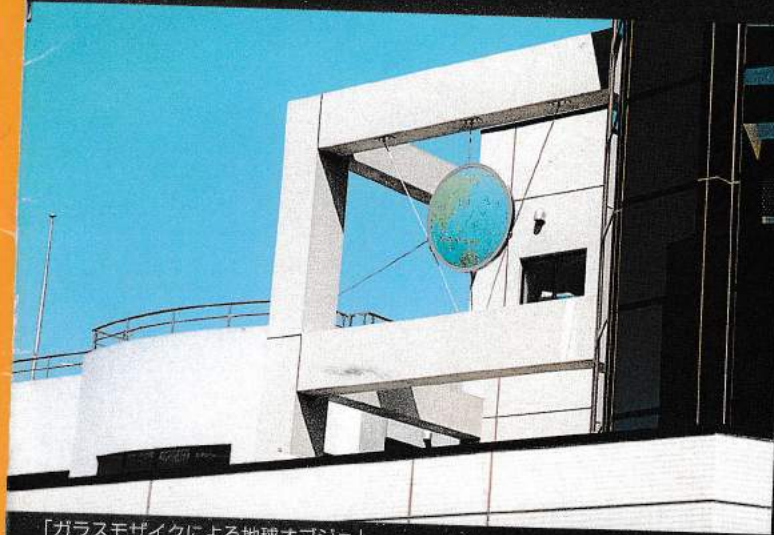




「MAZE2000 II」



「ガラスモザイクによる地球オブジェ」



「群馬県地区レリーフ」



「水の鼓動一絆」



NO.36 2001.11

aaca

社団法人 日本建築美術工芸協会

アピアランス



aaca会員
FIBERARTIST
KATAOKA YOKO
片岡 葉子
世田谷区中町1-11-8 大沢方
TEL/FAX 03-5707-2075

「MAZE2000Ⅱ」
2500×3300×100mm

織から出発した私ですが、様々な繊維素材、技法による表現を試みています。これは木の枝、真綿を用いたインスタレーションで、第64回新制作展に出品した物です。何かの巣、生き物の気配の様な物を表現しました。



aaca会員
造形作家
YANAGITA JUN
柳田 順
埼玉県比企郡小川町腰越542-1
TEL/FAX 0493-72-2863

「ガラスモザイクによる地球オブジェ」
朝霞市リサイクルプラザ「エコネット」
150mm

環境アートがようやく陽の目を見るところとなって来ました。人々が集う建築空間に、「知」の輝き、「情」の豊かさ、「意」のやすらぎを基底に据えて、多様な表現技法の試みを積極的に提言してゆきたいと、念願しております。



aaca会員
建築彫刻家
ENOMOTO MAKI
榎本 真規
東京都新宿区荒木町22 サクラガーデン

「群馬県地図レリーフ」
群馬県庁舎26階ふれあいテラス
650mmH×9,500mmW×10,000mmD

群馬県全域の立体地図レリーフを製作しました。市町村名、庁舎、小学校、幹線道路、鉄道を刻印した磁器陶板の上を自由に歩くことができる体験型のレリーフとして、県庁を訪れる人々の人気スポットになっています。



aaca会員
彫刻家
TAKAHAMA HIDETOSHI
高濱 英俊
東京都練馬区大泉町3-38-41-301
TEL 03-3922-1997

「水の鼓動一絆」
帝國データバンク 本社ビル
210×270×120cm

悠久の時間と普遍的な要素をもつ石という素材に、生命の象徴であり流動性をもった水のイメージを投入した作品です。めまぐるしく変化していく世界の中で、変わらぬ人々の心の絆を水のイメージと重ねて表現しました。

CONTENTS

文化・芸術と都市空間	1
時代の華一輪	4
aacaトーク	6
aaca見学会	7

■表紙デザイン

高部 多恵子

表紙の作品を募集しています。
事務局までお問い合わせください。
尚表紙のレイアウトは、広報委員会で行います
のでご了承下さい。

発行：観日本建築美術工芸協会
Phone 03-3457-7998
Fax 03-3457-1598
〒108-0014
東京都港区芝5-26-20
建築会館6F

振替：00110-2-365085

編集：(社)日本建築美術工芸協会 広報委員会

広報担当理事 柳澤孝彦

委員長 玉見満

副委員長 高部多恵子

北村孝昭、石田真人、山崎輝子

長谷川亨、瀬川秀之、佐田興三

事務局 長 伊藤留雄

制作協力：中栄印刷工業株式会社

「遊びと社会」

遊びをせんとや生まれけむ 戯(たわぶ)れせんとや生(む)まれけむ

遊ぶ子供の声聞けば わが身さへこそ動(ゆる)がるれ 『梁塵秘抄』

子供達の遊ぶ姿は人に生きる元気を与えてくれるものですが、一言に「遊び」と言われているものの種類は非常に多様です。人類の歴史の中で洋の東西を問わず実にさまざまな遊びが遊ばれてきました。一見たわいもない子供の遊びにしても、その種類は豊富で場所、季節、また遊び手の力量や人数を考えて選択され遊ばれています。一人の子供の持つ遊びのヴァリエーションは数十から数百といわれています。(「遊びの大事典」(東京書籍)で約6500種)。人の意識的な行動の中で何が「遊び」で何が「遊びでない」とかというのを考えてみると、意外に自明の理ようでよくわからないところが多いのに気づきます。

子供は物や、大人の行動を真似て遊ぶ事で世界や人間社会を学んでゆきます。子供にとっては「遊び」＝「学習」の世界といえます。大人にとっては「仕事」に対して「遊び」が休憩として考えられている事が多いと思いますが、「この休憩が仕事以上に彼の関心をひくこともしばしばである。時として、この休憩は仕事よりも一層のエネルギー、技量、知性、注意力を費やすことを人に要求する」(「遊びと人間」ロジェ・カイヨフ)というように、「自由」、「非生産的」、「創意工夫の余地」などの仕事にない魅力(?)が彼をひきつけ、休憩を仕事以上に豊かな時間に行っているという事が趣味やボラ

ンティアを通して生き生きと生活している人々の姿なのだと思います。

ヨハン・ホイジンガは著書『ホモルーデンス』1938の中で「遊び」としてわれわれの文化の一部を形成しているものの中に政治、経済、文化と言われるような人のいわゆる「まじめな活動」、「仕事」と言われているものとの相似性や仕組みの共通性を指摘する事で「遊び」の社会の中での役割を論じています。ロジェ・カイヨフはホイジンガの提案を引き継いで「遊び」の考え方をより拡大し実証的に深めました。ホイジンガの提起した遊びの動機、「競争」(スポーツ等)・「模擬」(演劇等)に加えて「運」(博打等)・「眩暈」(めまいを起こすような遊び)を提起してホイジンガがつまらない事として取り上げなかった部分を含めたより広い分析を試みました。

カイヨフによる遊びの定義を以下に記して「仕事」と「遊び」の境界線をはっきりさせようと試みました。

「自由な活動」

遊戯者が強制されないこと。強制は、遊びの楽しさを失わせる。

「隔離された活動」

明確な時間と空間の範囲内で行われる。

「非生産的活動」

賭け遊戯の場合遊戯者間の所有権の移動はあるが、生産性はない。

「未確定の活動」

創意の必要・工夫の余地を持っている。結果のわかるゲームはつまらない。

「規則のある活動」

他の規則を全て停止し、遊びの法を確立・厳守する。競技が遊戯かにより、この度合いが変わる。

「虚構の活動」

日常と対比した時、二次的現実、または明白に非現実であるという意識を伴っていること。

そして、「競争」(スポーツ等)・「模擬」(演劇等)・「運」(博打等)・「眩暈」(めまいを起こすような遊び)の四つの分類を「ルール-脱ルール」を縦軸にとり「意志-脱意志」を横軸にとった方向性を示すカテゴリーとして示し、「遊び」の傾向によって社会を特徴付ける指標としています。「たとえば、『競争』は意志によってルールの世界に向う遊び、『眩暈』は意志から脱却する事で脱ルールの世界に向う遊び、という風に理解される。…」

「近代社会においては、3. 模擬、たとえば芝居は大目にみられ、4. 眩暈、たとえばその病理形態としてのアルコール中毒などは大いに排撃され、逆に2. 運、たとえば富くじなどは大目にみられ、1. 競技、たとえばスポーツ競技などは大いに奨励される。すなわち、1. 競技を奨励し、4. 眩暈を排撃し、2. 運と3. 模擬は大目に見るとというのが近現代社会の趨勢なのである。(多田道太郎「遊びと人間」ロジェ・カイヨフ) (表2・図3参照)

スポーツはルール(場合によってはクラス分けをしたりハンディをつける事)によって競技者の平等を確保します。現代社会は「競争原理」を標榜し、人の出発点における不平等を曖昧にする事で社会的なバランスをとっているカイヨフは分析しています。王様でも乞食でもスター選手でも初心者でもこのルールの前に平等であるという現代社会の考え方の理想がここにあります。



街頭でのライブ



自転車の曲乗り



図3・遊びの位置付け

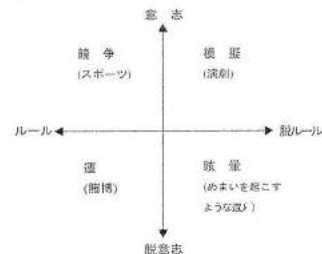


表2・カイヨフの分類図

	社会機構の外縁にある文化的形式	社会生活に組み込まれている制度的形態	墮落
アゴン(競争)	スポーツ	企業間の競争、試験、コンクール	暴力、権力意志、衝策
アレア(運)	富くじ、カジノ、競馬場、施設賭博	株式投機	迷信、占星術
ミミクリ(模擬)	カーニバル、演劇、映画、スター崇拝	制服、礼儀作法、儀式、表現にたずさわる職業	狂気[疎外]、二重人格
イリンクス(眩暈)	登山、スキー、空中サーカス、スピードの凶戯	眩暈の技術を見せる職業	アルコール中毒、麻薬

「文化・芸術と都市空間」

スポーツが法（ルール）の前の平等を表現しているとすれば賭博は神の前の平等といったものです。個人の出自、技量、熟練、推理といった事と関係無しに「運」は平等に人々におとすれろと考えられているので、人々は宝くじを買いますが当たるといふ確信はどこにも無いのです。

富くじは平等という幻想が人々に活力を与えるという理由と直接的、間接的に為政者の大きな財源になってきたという経済的理由で大目に見られていると考えられます。「古代ギリシャでの競技場の試合が、都市の理想を顕彰し、これに寄与するものであるのに対し、多くの現代国家での国営の富くじや競馬の賭けが、かねがね公言する理想に反するものであることは明らかである。にもかかわらず、富くじや競馬の賭けはやはり明確に意義のある、おそらくは不可欠の役割をはたしているのだ。原理的には労働と能力とだけが報酬をもらたす社会であるが、このカウンター・バランスとして射幸的な性質が求められれば求められるほど、その重要性は増大してゆくのである。」（「遊びと人間」ロジェ・カイヨワ）

「遊びと都市」

現代では、都市計画という行政的な事業の中で都市の機能別にゾーニングされた街区が計画的に造られるようになってきています。都市計画の中に「遊興街」という形での街区の計画は見当たりません。市街地の再開発計画でも「遊興街」については既存街区にその役割を譲る又は都市計画には計画しない部分として考えるというのが考え方のようです。このように「遊興街」は都市に必要な街区と

して認識されていないにもかかわらず主要都市には必ず存在する街区です。

多くの日本の都市には売春防止法が施行される1957年以前には色町として公認されていた遊興街がありました。その中の一つとして江戸の繁栄と共に発展した吉原について調べてみる事にしました。

吉原について

吉原の始まりは徳川家康が死んで間もない1617年（元和三年）で今の人形町2〜3丁目辺りに幕府から250m四方の敷地が与えられ建設されました。都市計画は京の遊郭島原を真似たといわれています。その頃の江戸は江戸建設の初期で1604年（慶長9）からの江戸城の大普請など整備・建設のラッシュとなっていて、圧倒的な男ばかりの町になっていたようで、藪町などあちこちに遊女屋が出来ていました。それを一箇所に集めて風紀、取締り上の便宜を図るといふ遊女屋の経営者庄司勘右衛門の提案を幕府が許可して公許の遊郭が誕生しました。（この時点で、江戸以外の都市には三十数ヶ所の遊郭が存在していたとのことですから、都市の機能としては必然性があったわけです。）

「吉原」の名前は葦＝葎の茂る野原の意味で、吉原は開設当初、周辺が葎の原なので「葎原遊郭」と呼ばれていましたが葎＝葎の茂る野原、葎の原（悪の原）ではよろしくないで縁起をかつぎ、悪を古に変えて吉原遊郭としたとの言い伝えです。

以後、江戸の末期まで江戸では吉原以外の私娼は隠売女（かくしばいた）といわれ許されませんでした。その後、江戸

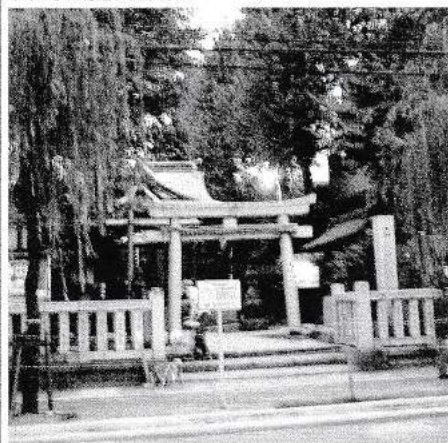
の出入り口となる品川、板橋などの宿場町がなし崩し的に公許的扱い（飯盛女といわれた）になる意外は吉原が江戸で唯一の遊郭という事になったわけです。

しかし、吉原の歴史を読むとその衰退期には吉原から私娼の取締りを嘆願する訴えが幕府に出されており、その都度取り締まると吉原が一息つく、しばらくすると隠売女がおおびらに商売をするという事のいたちごっこだったようです。（私娼は岡場所と呼ばれ飯盛女、湯女、洗濯女などがいました）

吉原が出来て四十年ほど経った頃、周辺環境の都市化が進み、かつて芦原だった所がすっかり街中になっていました。1656年（明暦2）吉原に再開発がかかります。つまり、幕府からの郊外への立ち退き移転命令で、幕府の御用地にするからという理由で抵抗するすべも無く浅草田圃（浅草寺北側の芦原）に移転を決定しました。翌年振袖火事があり、（明暦3年正月18日、江戸を根本から覆す大火、俗にいう振袖火事が発生。本郷6丁目から出火し、焼死者10万8000人、江戸の3分の2が焦土となりました。）江戸始まって以来の大火で萱屋町の吉原も全焼しました。移転命令から10ヶ月で浅草寺北側の日本堤（日本堤とは大川（隅田川）に流れ込んでいた山谷堀（川）の川岸沿いにつくられた土手のことで、高さは8尺（2・4m）から11尺（3・3m）程度。この土手八丁をてくてくと歩いていった先に新しい吉原は建設されました）に開業し、新吉原と呼ばれました。火事も手伝わってか、かなりのスピードで建設された事になります。焼け出された吉原の跡地には住吉町、高砂町などが作



千束2丁目付近と吉原神社



られましたが、幕府御用地になった形跡は無く、「歓楽街の追い出し」のような形になったようです。

幕府は吉原が辺鄙な浅草田圃に移転するのにたいして、いくつかの補償を与えました。元吉原は2丁四方でしたが、移転地はその1・5倍とする、移転料を1万500両を支給する、夜間も営業してよい、などです。新吉原は浅草の裏手、日本堤という江戸のはずれにあったにも関わらず、大勢の人が通い詰めたようです。しかし周辺は人家の少ない人寂しい場所だったので、よく追いはぎや辻斬りなどが出没したようです。吉原の内部も同様で、街灯もなく、かなり危ない場所だったようです。新吉原の町割りも元吉原を踏襲していますが、敷地が広がったので、各町に点在していた揚屋を一ヶ所に集め、江戸町1丁目と京町1丁目の間を割って揚屋町を設けたのが元吉原との大きな違いでした。

吉原は粋といわれる江戸文化の発信地となり、徳川幕府の安定と江戸繁栄の中で華やかなる町の文化を形成して行きます。

「元来遊郭は旅の客とか船の客など、見ず知らずの男たちに一夜の慰安を与えたところであった。春をもとめる者に春をひさぐということが遊郭の本源的な性格で、……ところで江戸時代になると、このいる町としての遊郭の中に、単なるいる町というのではなく遊郭を社交場として、その特定遊女に常連のいわゆるなじみ客というのが出来るようになり、これが新しい時代の特殊な風俗を形成するようになった。畠山箕山はその著『色道大鏡』で、こういう特殊な性格をもった

遊郭は、日本全国でも京・江戸・大阪・大津・伏見・奈良・堺の七遊郭だけだ、といているが17世紀には少なくともこの区別がはっきり意識されるようになっていたのである。」(「島原と吉原」西山松之助)

江戸の町人文化の隆盛の中でその粋を発信しつづけた吉原も変わって行きます。

「吉原は明暦3年8月の移転が大きな転換点になりましたが、風俗などを中心に見ると、1668年(寛文8)の散茶女郎の出現が本当の意味での新吉原の始まりであると断言していいかもしれません。それを決定的にしたのが宝暦年間(1751~64)です。この時代、大見世の三浦屋が廃業し、太夫、格子が消え、吉原の吉原らしさをつくっていた揚屋制度も終わりました。一方で、専門の女芸者が生まれ、編笠茶屋の編笠の貸し出しが行なわれなくなり、大門の入り口に新名所となる見返り柳が植えられました。」(裏長屋・「遊郭吉原」より)

吉原は時代が明治にかわっても、存続していました。1872「娼妓解放令」が布告され、遊女は自分の意思で商売し吉原を含めた遊女屋も貸座敷と名前が変わりました。

江戸時代には岡場所が一掃されたことでもあります。岡場所はむしろ幕府から容認されていたようです。つまり、吉原の存在を脅かすところがあり、吉原が訴え出た場合に限って、幕府はそこを潰しました。吉原が江戸唯一の公許であったからこそ、できたことでした。明治になり、貸座敷となってからは、次々と許可されて新しい形態の店が増えて吉原の

ライバルになっていきます。そのひとつが待合茶屋です。江戸時代の待合茶屋は、商人の寄合いや旅人の送迎などに使われたところですが明治になると、芸者を呼んで遊興した後、憩りになった芸者と蒲団に入る場所へと変わりました。1905年(明治38)頃、品川には待合を兼ねた引き手茶屋が貸座敷のおよそ6倍、100軒以上営業していたそうです。待合は場所を提供するだけのところで調理設備も無く、料理は料理屋から取り寄せ、芸妓屋から芸者を呼び寄せました。この待合、料理屋、芸妓屋の三業が集まっている地域を三業地と呼び、花柳界を形成し、昭和30年ごろまでの代表的な遊興地となっていました。いくつかは後に料亭と名前を変えて今日まで存続しています。

吉原と遊女屋の変遷を追う事で「遊興街」の都市における位置と文化的な発展、衰退を見てきました。いま新吉原だった街区には日本一といわれるソープ街(江戸で言えば「湯女風呂」でしょうか)がありますが、都市計画という人の知恵遊びのもう一方にこの街があるように思えました。

調査研究委員 石井博美・記

参考文献:

「江戸と上方」池田弥三郎・林屋辰三郎／「遊びと人間」ロジェ・カイヨワ／「江戸の遊女」石井 良助／「盗み・ばくち」石井 良助／「絵本風俗往来」菊池貴一郎／「都市民族論の課題」宮田 登／「裏長屋」

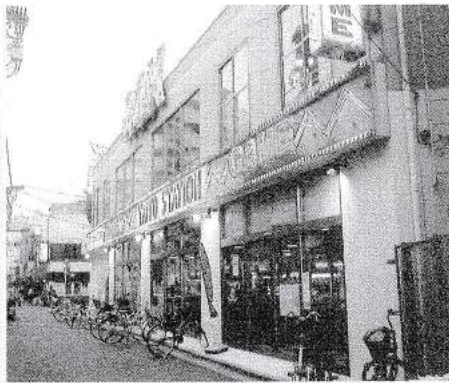
(<http://www.din.or.jp/~sigma/main.html>)



関東大震災前の吉原付近



花園通り付近



浅草のゲームセンター



Paaca理事
(株)坂倉建築研究所最高顧問
SAKATA SEIZOU
坂田 誠造
東京都港区赤坂9-5-12
TEL 03-3403-3551

美術館を通して見る、 建築の時代的変遷

50年という時の経過は、建築に多大の変化を齎すものです。

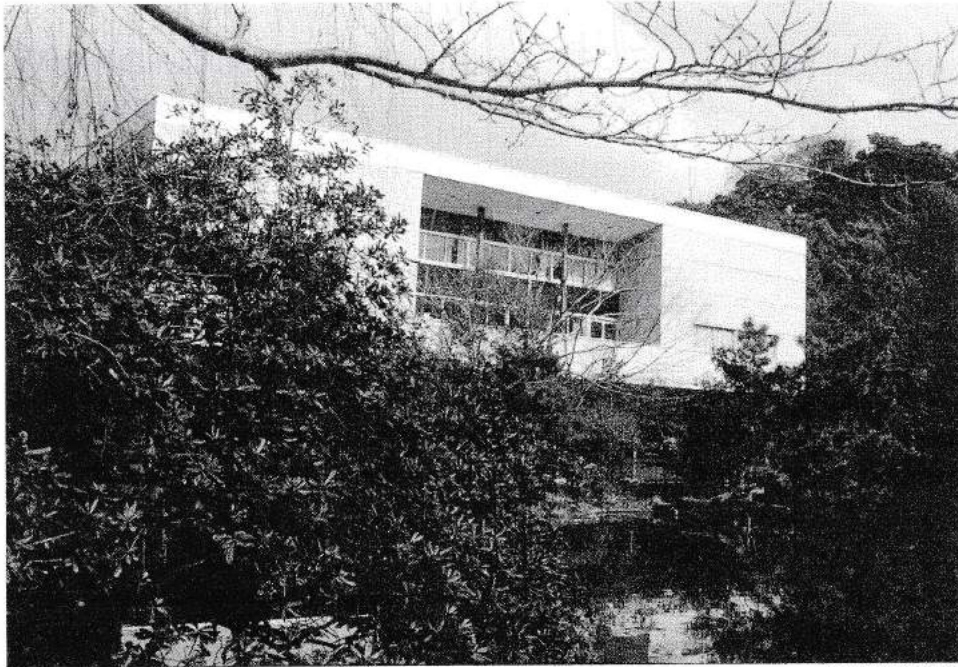
私が坂倉準三建築研究所に入った年の、11月に竣工した鎌倉近代美術館本館は、今年満50歳。超軽量の華奢な鉄骨建築は、目に触れない屋根梁や2階床構造に、実に挑戦的な設計がありますが、それは如何に安く造るかの工夫でした。国に先駆け、復興のノロシとされた近代美術館新設の指名コンペで坂倉準三案が選ばれ、全く提案通りに造られました。今日の美術館と比べて展示施設としても不備が多い施設ですが、その時代、社会の建築の反映であり、その後古都保存法

制定等で増築も大規模改修もできず、不備が残りました。この美術館の存在が貴重と考える人が集まり、存続を問いかける活動が近く始まります。師と先輩が精魂込めた建築の存続のため、私自身も大いに協力に励む覚悟をしています。

美術館を、唯一の芸術作品を展示する施設と考えるのは一般的ですが、研究的教育的視点からは、異なる発想、企画が生まれました。物質的耐久性と強度に優れ、写真並みの高精度な原寸大コピーを造り出す、当会会員大塚オーミの技術的成果を原点に、アンドレ・マルローが夢見た空想を実現させる企画に結んだのが、一昨年竣工した大塚国際美術館です。この建築の設計に指名され、時代が挑戦する新しい美術館計画に参画し、青柳正規教

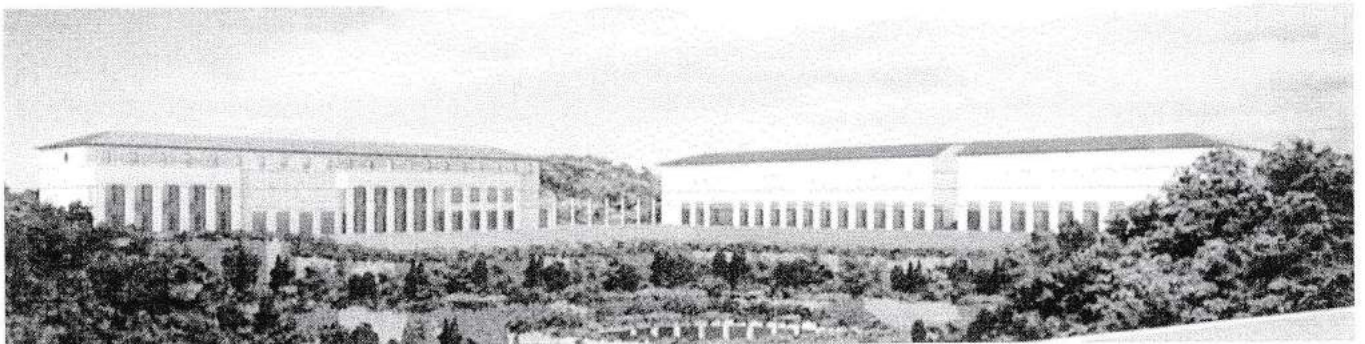
授始め6人の錚々たる西洋美術史の先生たちとともに、貴重な体験を得た数年を過しました。環境展示として、チャペル内部を原寸大に再現し、本家の管理建築家からも注目される成果を得ましたが、この美術館の真価は使い方で定まるでしょう。利用者の楽しみ方、他ではできない利用を喚起する、新種の美術館として、正当な評価を獲得するまでには、暫く時の経過が必要なようです。設計上では、展示の照明に配慮と現場の苦労がありました。

時代の新しい挑戦こそ、恒に私たち職能に大切な、工夫を刺激する原点になるのです。



鎌倉近代美術館新館

大塚国際美術館



時代の華一輪



aaca理事
(株)三菱地所設計取締役副社長
SHIMIZU SIGEO
清水 重男
東京都千代田区丸の内2-7-3東京ビルディング
TEL 03-3287-5586

来年の8月の竣工を目指して、丸ビルの建替え工事が東京駅前が進んでいます。

今回の新しい丸ビル計画では、このビルだけに留まらず、丸の内全体の新しいイメージ造りを目指してビルの計画が立てられています。

それは、今までの事務所空間の集積にしかすぎない、土日には閑古鳥の鳴く丸の内からの脱皮をめざして、24時間賑わいのある「街」を形成しようということです。

そのためには、単に商業施設の集積をつくるだけではなく、文化を発信できる街でなければならないと我々は

考えています。

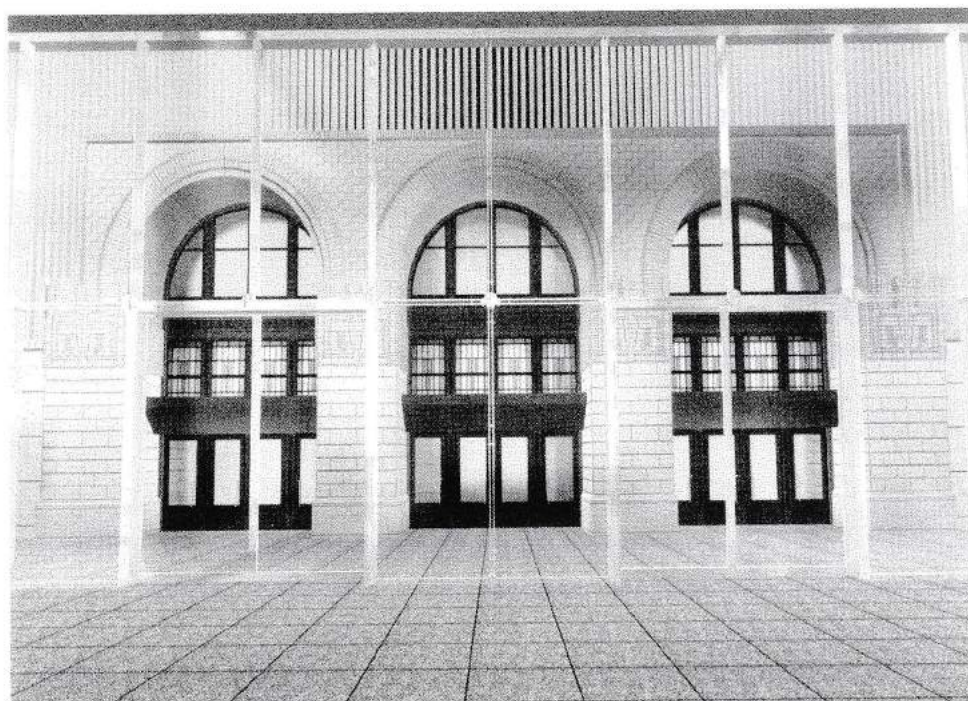
その様な目的に向かって、建物の設計段階からアートはこの建築の中で如何に建築と平行に設計していけるかと言うことを一つのテーマに掲げて設計に取り組んできました。実際には、彫刻家の川上喜三郎さんにアートディレクターとして、設計の早い段階から参加して頂き、その後アメリカから「アート イン アメリカ」のシニア エディターのジュネット コプロス氏とロンドンのアートプロデューサーのピピアン ロベルト氏に参加してもらい、川上氏を中心にこの3人でアートコミッティーを作っていただけ、建物の各部でのアーティストとの協

同作業を行うべくアーティストの選出を行っていただいています。現在、やっとアーティストの候補の選出がほぼ終わり、建築との協同設計に入ろうとしている段階です。

この様なアーティストとの協同作業の手法は今後、丸の内仲通りの活性化の手法にも、またこれからの丸の内の建築の建替え計画にも取り入れてゆくつもりです。丸の内のまちづくりを通して、アートと建築との良いコラボレーションが出来たのではないかと、丸ビルの完成を楽しみにしております。



「丸ビル」完成予想図 (CGベース)



旧丸ビルの三連アーチの出入口を復元 (CGベース)



aaca会員
(株)ベアデザインアート代表
HAMAZAKI BEA
浜崎 ベア

東京都中央区日本橋浜町2-17-6ハマヤビル2F
TEL 03-3661-0186

「ブリスアートが生まれるまで」

ブリスアートとは、多くの優れた特性を持つ東レエクセーヌと発泡性特殊ボード（断熱/防音建材）とのすばらしい出逢いから始まった新しい技法によるアートです。

東レエクセーヌは、アパレルは勿論のことインテリアとしてさまざまなライフシーンを彩っておりますが、その高品質マテリアルをもっと生かしアートを併い創り上げたのがブリスアートです。

現在ドア、ワードローブ、サイドボード等に内蔵しインテリアとしての提案をもって製作しているブリスアートは、温かみのあるボリューム感としなやかな質感は格調高く、視覚に大きく訴えるグレイドの高いアートです。

日本橋高島屋でブリスアート展示会を開催した時の小さなお話をひとついたします。

ノールな容姿の老婦人が杖を片手におぼつかない足どりで催事場にたたずみ、

つくづくブリスアートをながめておられました。

「初めて拝見しました、なんて素晴らしいのでしょうか」と感想をのべられ老婦人は、長い病院生活が明けてリハビリを兼ね久しぶりにデパート内を歩いたとき、たまたまブリスアートに引き付けられ足を止められたそうです。

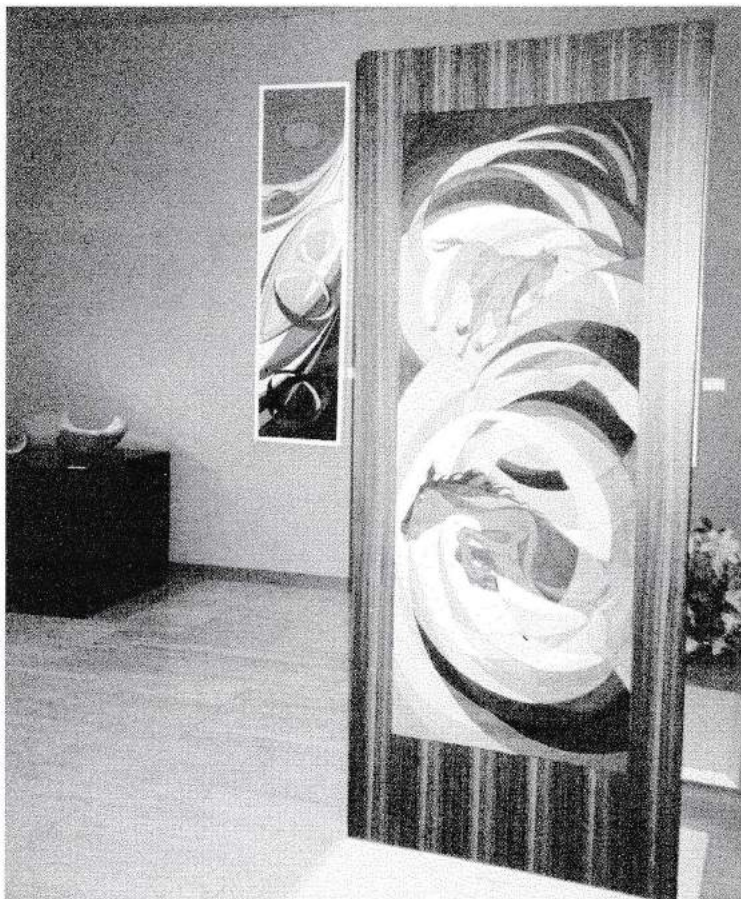
そこには3号から4号の風景画を展示しておりました。「若い元気なころは世界中よく旅行をしてあらゆる手工芸をマスターしました、陶芸から、油絵から、刺繍から」老婦人はたよりない指先で目頭を何度も押さえ遠く過ぎ去った日々がまるで昨日の出来事のように語り始めると、「今日は本当に良いものを見せて頂いてありがとう、アートを見てこんなに感動したのは始めてよ、生きる勇気が湧いてきたわ」と何度も礼を云い涙を拭き静かに踵を返されました。

彼女の心の中に去来するものは私には到底（とうてい）計り知る事は出来ませんが彼女の想いと私の心は共通しております。

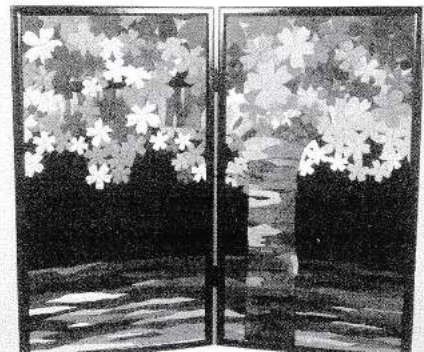
した。最高の感動と感激であり、心から感謝いたしております。

彼女はブリスアートに、そして私は老婦人に。スタッフ達の目が輝き、満足感と自信にあふれ、そんな気持ちを楽しんでひとときもしたのだろうか、またその老婦人は現れまして、そして近ずき「どうしても忘れられないこの作品ドイツ、ローテンブルク風景画この絵が“勇気をもって私に生きなさい”とあたたく呼びかけてくれているようで」そしてまた感動の涙を流されました、そのようなことがあり、ここはデパートの展示場なのでその作品を差上げる訳にもいかずお買上げいただいた、次第です。

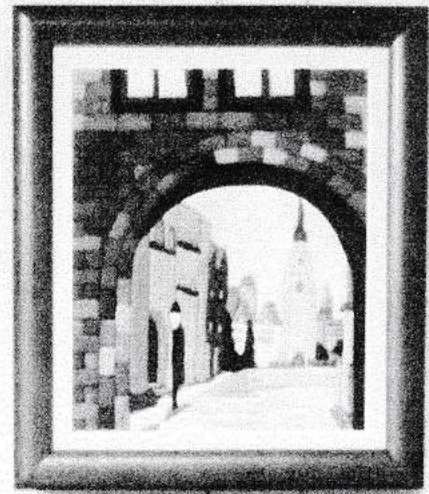
そして最後に「ありがとうございます、お元気で」と握手を求め差出した手に彼女の分厚い温もりの感触は驚くほど力強く感じられ何故か私には一生忘れる事の出来ない感動の一瞬であり、この素晴らしい一期一会に深い噛み締を味わいブリスアートを創設したことに無上のよろこびを覚えました。



翔馬



音らんまん



老夫婦が気に入ったローテンブルクの絵



aaqa会員
建築家吉田イサムとアーキ・ハイ
YOSIDA ISAMU
吉田 イサム
仙台市青葉区中山6-1-13
TEL 022-279-7051

AAQA 移動見学会で —仙台にお迎えして—

かねがね本部の方々のご来仙、サロン・ド・トークにご参加頂けることを心待ちにしておりまして、見学会、仙台メディアテークに行くことになったからとのご報告受け、一瞬喜びに笑みを浮かべ、在仙会員に連絡したものの、もう2週間後であれば、もっと素晴らしい会になったものを、と残念な気持ちにもなる。

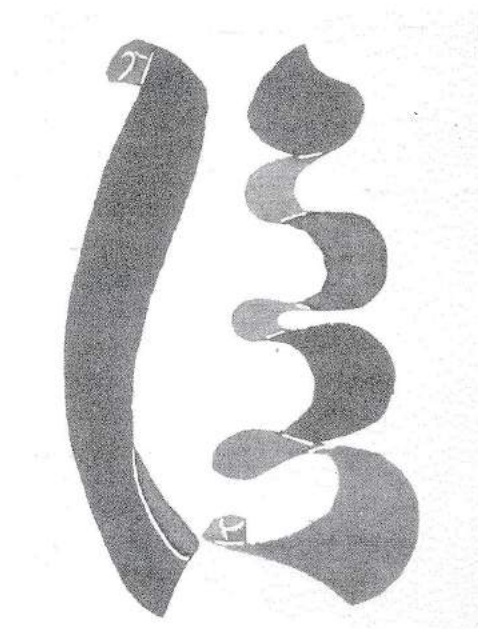
メディアテーク開館以来、市民の間の感想は様々で、ことに5、6階のギャラリーの展示に関しては、壁面の延長数だ

けで良否判断して来た美術愛好者にとっては、ガラス面の多いこの建物には光と共に、とまどいから様々な声が館にぶつけられている。私の作展は6月1日から6日までと、割当てられたの機に、伊東豊雄氏のこの建物の最大の特長である“透けた空間”を会場のレイアウト、ディスプレイに徹底することにより一つの例を示そうと思ったのである。可動壁面は全てとり払われ、空間の核となるものとして伊部京子氏の和紙造形作品の吊物をお願いした。その周辺には和紙、和紙と土の平面作品も添え、それに続いて、鳥の子和紙をパネル化して、イタリアに持参して描いた水彩画の私の作品が続く

……。初日に、サロン・ド・トーク第5回を伊部氏のスピーチで“和紙に魅せられて”。コメンテーターに、三木経一郎氏にと既にポスターも出来上っていたのである。6月1日開催と……。残念!!

さて、わざわざご来仙の28名の方々にメディアテークの見学だけでいいものか、料理で云えば、いきなり刺身を出して、これで終わり!?やはり、煮物、焼物と欲しい。ふさわしい簡処は次なるものとおすすめした。

芹沢銈介美術工芸館内



芹沢銈介氏作品

◆「芹沢銈介美術工芸館」

既に第一回をここで、芹沢長介館長をスピーカーに、渡辺信英福祉大学理事学部長をコメンテーターに行ったところだが大同氏、三木氏のみ来られただけなので是非にと、ご案内する。

人間国宝、染色美術家、芹沢銈介氏の作品は勿論のこと、膨大な収集品が展示されている。定期的に展示内容が変わるが、未だ同一の物は見た事がない程である。三層に渡る広い、ゆとりのある空間市内見下す眺望絶佳のティールーム、芹沢長介氏のご案内で満足されたことだろう。在仙会員、柳沢陽子氏、平本重徳氏

が同道した、丁度、私は福祉大学の講義と重なり、早々に終えたものの、皆様には、別棟のレストランのテラスで待つて頂くことになった。煮物、でじっくり味わい、口なおしをされたら次はいよいよ強肴、交流会である。

◆「笹生の里」

大町、仙台城大手門につながる旧城下メインストリートに面し、隣はかの有名な“荒城の月”の作詩者、土居晩翠の居宅、ユネスコ会館に接し、仙台名物、阿部の“笹かまぼこ”の企業文化館とも云うべき建物で、中庭を囲い、茶室、本館はサテライト工場、店舗、そして食事処

と蔵の外観に猛宗竹、水の流れに旅人も、ほっと休まる構えである、山形在住会員本間利雄氏の設計になる。丁度仙台での会議に居合わせ、同席することとなった。

会長、事業委員他12名、仙台在住会員を含めて21名の方々の床に腰を下し和食料理を前に、本間氏提供の出羽桜が一層華やかさかもし出し、在仙鈴木弘人氏の歌まで出て、月明りに時間一杯交流を計ることが出来た。青葉祭りの鉦の音に誘われた一泊の方を残し、充実した一日を胸に帰路につかれた。再会を期し。



笹生の里



aaca事務局長

ITO TOMEO

伊藤 留雄

東京都港区芝5-26-20建築会館6F
TEL 03-3457-7998

「せんだいメディアテーク」 見学会に参加して

事業委員会恒例の見学会は今回は仙台市にオープンした「せんだいメディアテーク」+芹沢銈介美術工芸館を見学した。5月の快晴に恵まれ仙台の杜は新緑を一層深め、心地よい涼風のもと、東京からの会員参加は芦原義信会長をはじめとして27名の参加となり、一行は東京駅に集合し新幹線「やまびこ」に乗車、現地仙台在住会員と合流しての見学会となった。

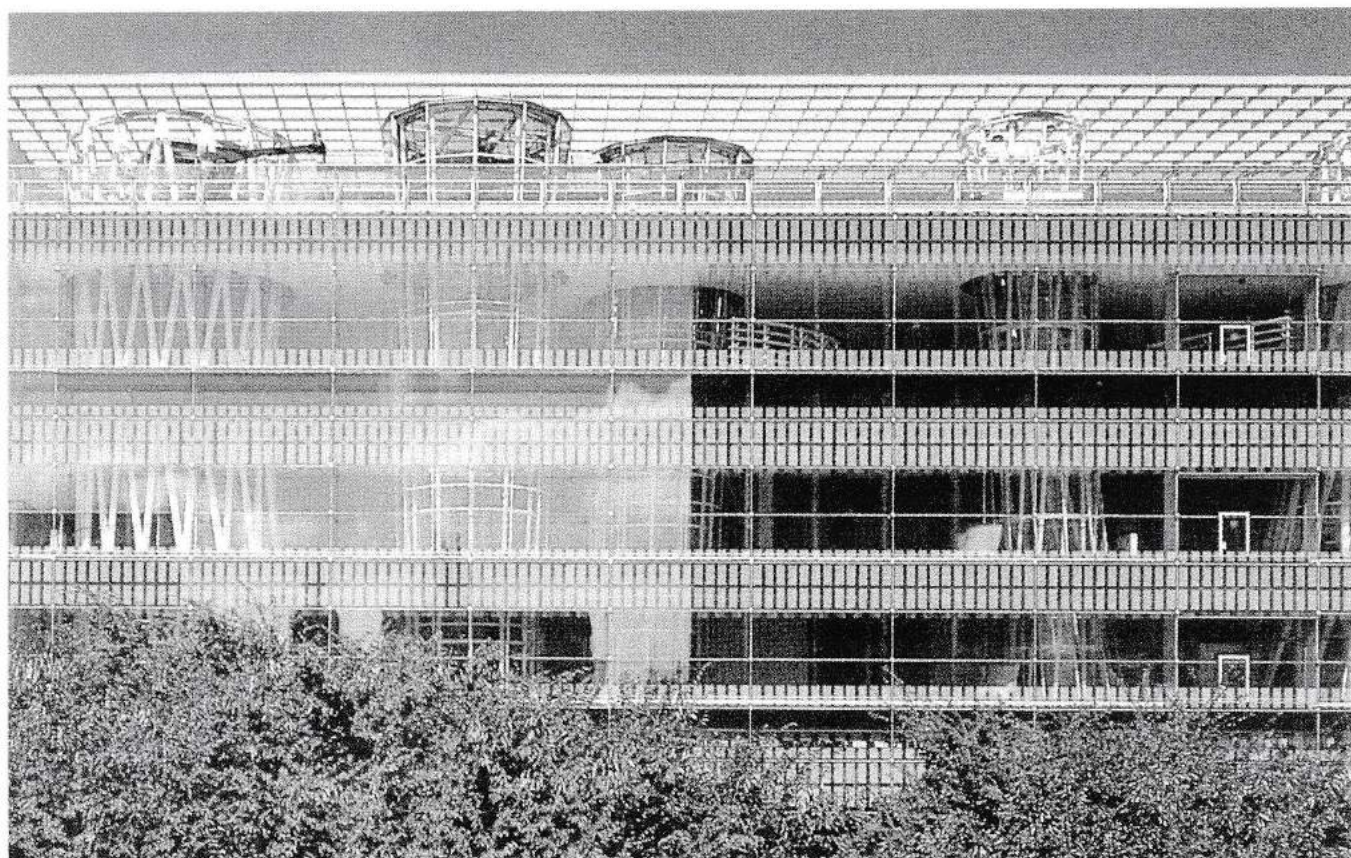
「せんだいメディアテーク」

仙台市による公開設計競技により伊東豊雄設計事務所による設計で区立図書館・市民ギャラリーを中心とする複合機能を有する施設であり、「メディアテーク」とは伊東豊雄氏著「透層する建築」のなかで設計競技応募要項によると「感性メディアとしてのアート、知性メディアとして図書と各種の情報等が融合した新しいメディアとしての映像などを総合

的に集積、提供するとともに市民ひとり、ひとりが自ら創造し発信者となることを支援する新しい時代の新しい都市機能空間をイメージするもの」となっております。一行は「せんだいメディアテーク」1階で全員集合し7階フロア会議室で伊東豊雄設計事務所並び施設管理者からの説明を聞いた後、スタジオシアター映像音響ライブラリー・美術文化ライブラリー等の施設のある7階から順次6階ギャラリー4200へ、ここは可動壁を中心とする天井高4.2mの展示空間、5階ギャラリー3300は天井高3.3mの展示空間、3階はライブラリー仙台市民図書館、2階インフォメーションスペース、1階はプラザで定禅寺通りに開き、街に連続する屋内型公開空地となっており、全館に亘る各施設の見学を終了しました。私見として感想を申せば構造システムがこれまでの公共施設とは異なっており、説明によると13本の鉄骨独立シャフト（チューブ柱：主に鋼管トラス構造）と7枚の鉄板スラットスラグ（ハニ

カムスラブ鋼板サンドイッチ構造）で構成されている建築と聴いて、まず驚かせられました。そして建物の色調はガラス面を透して各ポイントに鮮明な色彩を施しており、建物全体の外観は大きな一つの彫刻作品として目に映ったのが私の実感でした。またこの「メディアテーク」が杜の都仙台の青葉区に、新しい建築空間として出現し多くの市民が、この施設を活用して益々文化交流を高めることに際しては、見学者の一員としてなんととも羨しい限りです。

まして空調システムに於いては北国の気候に配慮し南面は二重ガラス面（ダブルスキン）と上部の開閉機構により空調コストが軽減され冬季は閉めて断熱性の高い空気層ができる構造となっており、このガラス面は更にプラスして街路樹の「けやき」の景観まで併せ配慮されているとの、説明を聴き及びに至っては、更に感慨を深めるばかりで第2見学場へと急ぎ会場を後にしました。



せんだいメディアテーク



JAPAN
ASSOCIATION
OF
ARTISTS
CRAFTSMEN
AND
ARCHITECTS

aaca 会員募集

協会では会員を募集しております。
お知り合いの方をご推薦ください。
詳細は事務局まで
お問い合わせ03-3457-7998